東洋文化研究所要覽

昭和27年3月

C 3
45
/

東洋文化研究所要覽

目　　次

Ⅰ　沿　　革 …… 3

Ⅱ　目的と性格 …… 3

Ⅲ　組織機構 …… 4

Ⅳ　職　　員 …… 4

Ⅴ　設　　備 …… 7

Ⅵ　研究業績 …… 9

A　主要研究業績概要 …… 9

1.　中國における土地所有の史的展開 …… 9

2.　中國社會のギルド及び家族 …… 11

3.　東洋における近代資本主義と國際關係 …… 13

4.　ユーラシアにおける文化交流 …… 14

5.　東洋における文化の諸形態 …… 15

6.　東洋宗教の諸形態とその基盤 …… 17

B　研究報告 …… 19

C　東洋文化研究所紀要 …… 29

Ⅶ　研究活動 …… 30

A　研　究　會 …… 30

B　東洋文化講座 …… 37

C　東洋文化研究會議 …… 40

附錄　東洋學會とその機關誌
「東洋文化研究」及び「東洋文化」……42
Ⅷ　現在の研究課題……48

東京大學圖書
<10>6470039881
東京大学東洋文化研究所

I 沿　　革

本研究所は昭和16年11月26日，東洋文化の綜合的研究を目的として東京(帝國)大學に附置せられ，同大學附屬圖書館内に，研究室，書庫，事務室を置いた。設立當初は哲學・文學・史學部門，法律・政治部門，經濟・商業部門の三部門からなり，教授3名，助教授3名，助手6名の定員を有した。

昭和24年1月22日，新たに3部門を加えて6部門となり，定員も教授6名，助教授6名，助手9名に擴大せられた。その結果部門組織も細分せられ，1. 哲學・宗教部門，2. 文學・言語部門，3. 歴史部門，4. 美術史・考古學部門，5. 法律・政治部門，6. 經濟・商業部門を設け，同時に本據を文京區大塚町56に移した。

次いで昭和26年度に至り，更に2部門の擴張を認められ，現在においては，從來の第3部門と第4部門との間に，4. 文化人類學，5. 人文地理學を加えて8部門に分れ，定員も教授8名，助教授8名，講師3名，助手17名に增加した。この外東京大學法學部，文學部，經濟學部の教官を兼任教授（5名）或は助教授（1名）として迎え，研究の强化を計つている。

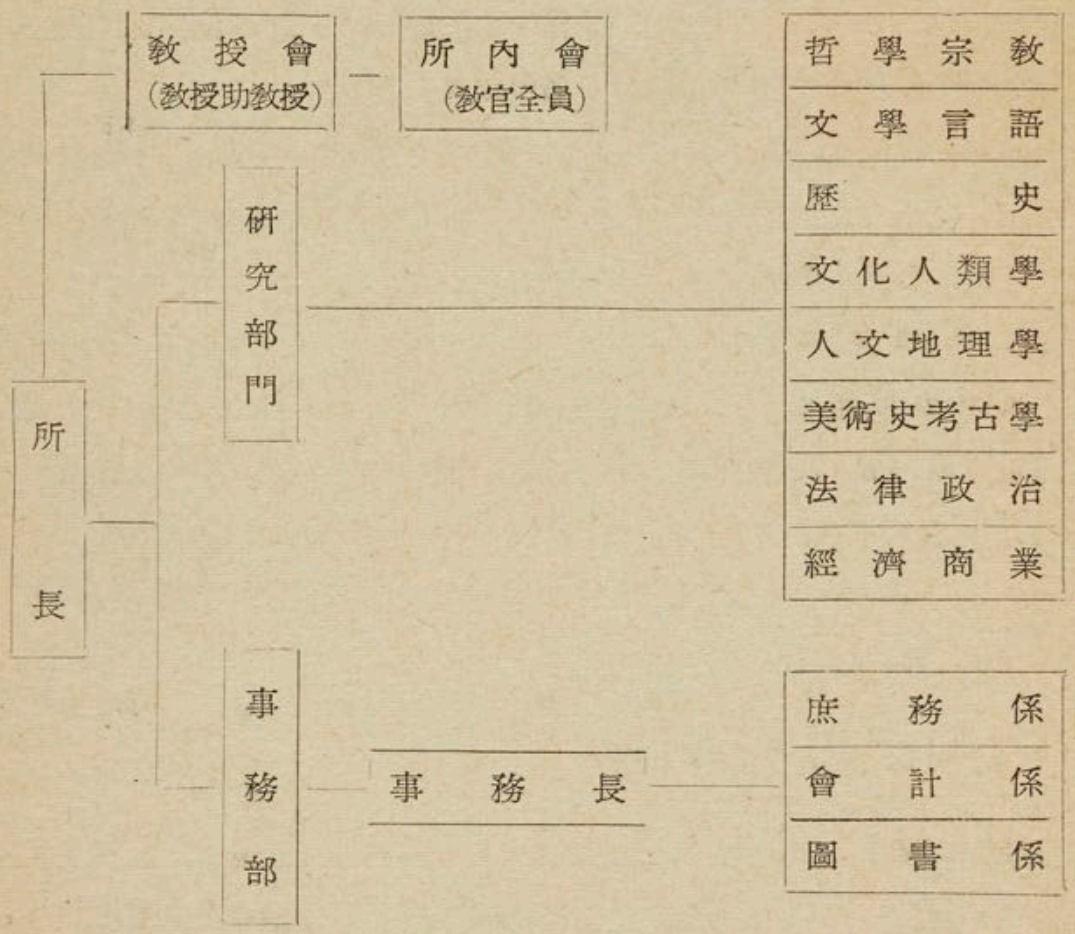
II 目的と性格

本研究所の使命は，日本をも含む東洋全般にわたる文化現象，卽ち宗教，哲學，文學，言語，民族，歴史，地理，美術，法律，政治，經濟等を組織的且つ綜合的に研究するにある。勿論現在の組織機構を以て，かかる廣汎な地域における各般の問題を同時に究明することは不可能であるから，各所員の專門に從い，重點的に課題を選んで，出來得る限りの効果を納める方針をとつている。しかし如何なる場合にも各專門分野の孤立することを避け，常に研究者相互の連絡を圖り，共通の問題意識を育てつつ個別的には達成し難い組織的な綜合研究の實を擧げるに努めている。殊に諸科學間の限界領域にあつては，何處でも取扱われぬ研究領域の開拓をも目差している。また過去の研究に際しては現在の實態を顧慮し，現在の解明に當つては過去の歴史を尊重すると云う原則を堅持している。要するに東洋文化の諸要素が，

A33375

互に緊密な關係にあることを自覺し，廣い基盤に立ちつつ精深な專門的研究に從事せんとするものである。

Ⅲ 組織機構



Ⅲ 職員

職員數（昭和 27. 3. 31. 現在）

教授	8 名	（兼）5 名
助教授	7 名	（兼）1 名
講師	1 名	
研究員		（兼）1 名
助手	12 名	

事務官	5名
雇員	12名
傭人	5名
計	50名

職員氏名(27. 3. 31. 現在)

			(本研究所就任年月日)
所長		辻 直四郎	22. 9. 30
教授		仁井田 陞	17. 1. 16
		飯塚浩二	17. 1. 16
		江上波夫	22. 12. 31
		結城令聞	23. 4. 1
		植田捷雄	17. 1. 16
		米澤嘉圃	23. 4. 1
		川野重任	17. 1. 16
		石田英一郎	26. 5. 21
	(兼)	山田盛太郎	22. 8. 20
	(兼)	宮澤俊義	19. 9. 27
	(兼)	丸山眞男	17. 3. 19
	(兼)	山本達郎	17. 1. 16
助教授		橋本秀一	17. 1. 16
		小口偉一	17. 11. 30
		周藤吉之	23. 4. 1
		窪德忠	23. 4. 1
		松本善海	18. 7. 31
		關野雄	26. 11. 16
		泉靖一	26. 11. 21
	(兼)	西嶋定生	23. 4. 1

講　師		築島謙三	18. 12. 14
研究員	(兼)	江　實	26. 4. 1
助　手		荒松雄	22. 9. 30
		花村芳樹	22. 9. 30
		衞藤瀋吉	24. 1. 10
		小堀巖	24. 1. 10
		古島和雄	24. 3. 31
		堀敏一	24. 3. 31
		小倉芳彦	24. 3. 31
		高木宏夫	24. 8. 1
		佐伯有一	26. 4. 1
		宮川透	26. 4. 1
		稲葉誠一	23. 4. 1
		大木幹一	23. 4. 1
事務長		長内太郎吉	19. 7. 10
事務官		塚本章壽	23. 4. 1
		野依菊之助	21. 8. 22
		田頭敏	23. 1. 6
		岡庭文雄	23. 4. 1

舊職員氏名

(本研究所在職期間)

所長教授		桑田芳藏	16. 11. 27～18. 3. 31
		宇野圓空	18. 3. 31～21. 10. 5
		戸田貞三	21. 10. 5～22. 9. 30
教　授		宇野圓空	17. 1. 16～21. 10. 5
	(兼)	北山富久二郎	17. 6. 26～19. 7. 30
	(兼)	荒木光太郎	19. 7. 30～20. 9. 30

助　手	鈴木忠和	17. 5. 25～22. 9. 11
	鈴木中正	17. 3. 9～23. 3. 31
	坂野正高	17. 9. 30～23. 9. 24
	山口　修	22. 9. 30～26. 9. 16
事務官	山高力三	16. 11. 27～17. 10. 1
	根本喜藏	16. 12. 8～19. 7. 8
	荻野秀一	18. 3. 31～21. 3. 31
	高木武雄	18. 5. 18～20. 5. 25
囑　託	木村甲一	16. 12. 27～17. 5. 7
	今堀誠二	17. 5. 15～17. 11. 19
	須田昭義	17. 6. 30～19. 6. 30
	土屋喬雄	17. 11. 13～19. 12. 25
	吉川逸治	17. 11. 30～23. 3. 31
	藤井　宏	17. 11. 30～22. 3. 31
	後藤基巳	17. 11. 30～25. 3. 31
	磯田　進	17. 11. 30～18. 4. 30
	大場千秋	17. 11. 30～21. 9. 30
	梶芳光運	18. 9. 30～23. 3. 31
	張　漢　裕	19. 3. 31～21. 7. 31
	四宮和夫	19. 8. 31～23. 3. 31
	飯田須賀斯	23. 4. 1～26. 3. 31

V　設　　備

現在の建物は外務省が東方文化學院東京研究所として建築し昭和8年8月竣工，現在外務省の所管に屬している。

敷地面積	5,081.22 平方米
本館延面積	3,012.5 平方米

門衛所延面積　　78.15 平方米

昭和 21 年度以來外務省研修所が 1,500 平方米位使用しているので研究室不足のため（及び學内での研究及び連絡の必要上）本郷の圖書館研究室を5室使用してようやく研究者を收容している狀態である。

藏　書　數

洋　書	7,877 冊
和　書	22,017 冊
漢　籍	145,281 冊
計	175,175 冊

大木文庫の受贈

本文庫は本研究所創設の當初，大木幹一氏の寄贈にかかる中國法制關係圖書であつて，總數 3,176 部 45,450 冊。法律のみならず，政治，外交，經濟，產業などの研究上，實用に供し得る意味での貴重書が多く，清代以後の時期の研究にはとくに缺くことのできない蒐集資料である。いわゆる官箴や公牘の類の數百部は，本文庫の一つの柱梁をなしている。

帝國學士院東亞諸民族調査室藏書の移管

戰後帝國學士院東亞諸民族調査室の解散にともない，その藏書約 750 點（和洋書・雜誌・資料を含む）が移管せられたが，そのうち特に洋書の部分は東亞諸地域における西歐の主要な民族研究を網羅する優れた蒐書である。

松本忠雄氏舊藏書の購入

昭和25年度科學研究費交付金のうち，人文科學關係の重要研究に必要な器材および圖書購入費により，松本忠雄氏舊藏のうち 3,213 冊（內譯，洋書 583，和漢書 2,455，雜誌 175）を購入，書庫に收納した。これらの書物は，とくに近代中國研究資料として，重要なものを多くふくんでいる。

長澤規矩也氏舊藏書の購入

昭和26年度科學研究費交付金のうち，人文科學關係の重要研究に必要な器材および圖書購入費により，長澤規矩也氏舊藏の雙紅堂文庫のうち，435 點を購入，書庫

に收納した。その內容には，主として明淸時代の文學關係のものを含み，稀覯書も少くなく，中國研究上の重要な資料となるものである。

Ⅵ 研 究 業 績

A 主要研究業績概要

文部省直轄及び國立大學研究所研究業績要覽（1950 年度）による。右業績要覽は本研究所について 6 單位にまとめることを要したものであり，かつ記述の長さにも一定限度があつた。文中の a は主たる研究者，b は研究業績の概要，c は研究業績の對外的な影響。

1. 中國における土地所有の史的展開

a 助教授 周藤吉之，助教授 西嶋定生

b 中國の社會は 4000 年にわたつてなんら本質的な變化はなく停滯的であつたという從來の通說を批判して，そこに歷史的法則性による進步と發展を探求するために，中國社會の基本的な構造である土地所有形態の各時代における特質およびその相互間の發展關係をあらゆる角度から研究しようとして，教授仁井田陞，助教授周藤吉之，助教授西嶋定生，講師（現助教授）松本善海，助手堀敏一，助手古島和雄等の共同研究のもとに以下の成果が發表され，從來の中國史の理解を革新する氣運を熟成するに至り，學界に多大の影響をあたえつつある。これを年代的に紹介すると次の如くである。

助教授西嶋定生は「中國古代帝國形成の一考察——漢の高祖とその功臣」（歷史學研究 140，昭和 24 年 9 月）において，漢の高祖とその功臣の集團が，當初非血緣者と家內奴隸乃至は擬制的家族員の形式によつて結合した生活集團，卽ち當時の豪族集團の形態であり，かかる集團を基軸として成立した漢の帝室はそのまま豪族的性格をもつていることを論證した。ついで「漢代の土地有制——特に名田と占田について」（史學雜誌 58 の 1，昭和 24 年 6 月）において，かかる豪族的集團の物的基盤としての大土地所有を論じて，この時代，官によつて識認され田租納付の負擔を課せられた私有地名田（前漢）あるいは占田（後漢）は，家父長的土地所有の形態であるこ

とを明らかにした。そして「古代國家の權力構造」(「國家權力の諸段階」所收，昭和 25 年 10 月）は，かかる土地所有の發生過程及び經營形態を論じながら，それに基いて成立する中國古代帝國の構造を總括的に述べたものである。豪族集團による大土地所有の發展は，古代專制國家の存立にとつて異常な危機をかもし出した。そこで國家はこれに對應して，新の井田法，晋の課田，占田法にみられるように，大土地所有のより以上の發展を阻止し，上より自營農民の創設に力を注ぐ政策をとりあげ始めた。この政策の頂點に立つものが，北魏に成立し，隋唐に受けつがれた均田法である。この過程の研究に從事しつつある講師（現助教授）松本善海は，「世界の歴史・東洋」（昭和25年3月）において，とりあえずその研究の結果を概說している。助教授周藤吉之は「宋代の佃戸制」（歴史學研究 143，昭和25年1月），「宋代莊園の管理」（東洋學報 32 の 4，昭和25年4月）において，宋代莊園制の發展を述べて，これらは奴隷よりも佃戸によつて耕作されており，それらの佃戸は自由な小作人ではなく，農奴に比すべきものであることを論證し，莊園の管理が莊官による外，佃戸の中より選ばれた甲頭によつても行われていた事實を明らかにした。ついで「宋代官僚制と大土地所有」（「社會構成史大系」所收，昭和25年8月）において，宋の官僚がかかる莊園制を基盤とする地方の豪族（形勢戸）より出で，宋は科學制によつてかれらを官僚組織の中に吸收し，これに特權を賦與したため，官僚はこれによつて大土地所有を行い遂に宋もこれを制限する政策をとらざるを得なくなつた過程を分析した。「宋代の鄕村における小都市の發展」（史學雜誌 59 の 9，10，昭和25年9,10 月）は，當時土地の開發に伴い，生產力が上昇したため，村落の間に多くの小都市が發展したことを述べたものである。助手堀敏一は，宋代の佃戸の農奴的性格より當時における國家の權力構造を論じて，東洋における封建國家の性格を把握しようとしている（中國における封建國家の形態「國家權力の諸段階」所收，昭和25年10月）。

教授仁井田陞は，「支那近世の一田兩主慣行とその成立」(法學協會雜誌 64 の 3，4，昭和21年3，4月）において，主として華中・華南に分布する一田兩主慣行の分析を行い，田面，田底兩權の所有形態の地域的な相違を檢出し，これが歐洲中世の分割所有權のごとき，封建的な身分支配權及び庇護の，人格的な關係を有していない

點を特質づけた。

助教授西嶋定生は明代の棉業形成に關する考察をも行い、「16・17 世紀を中心とする中國農村工業の考察」（歷史學研究 137, 昭和24年1月）においてこれを體系的に構成した。この初期棉業の形成は，商品生產を目的として16・17世紀において展開を完了したが，これを生み出した母胎は，中央集權的專制支配による土地制度の强壓であり，しかも貧農の家計補足手段として發達したために，强く商業資本の支配を受け，農民は土地制度の緊縛から開放され得ないで，單純再生產を繰返すに過ぎなかつたことを明らかにした。この立論の基礎をなす個別分析には，「支那初期棉業市場の成立」（東洋學報 31 の 2, 昭和22年10月），「明代における木棉の普及について」（史學雜誌 57 の 4, 5, 6, 昭和 23 年 4, 5 月），「支那初期棉業の成立とその構造」（オリエンタリカ 2, 昭和24年3月）がある。助手古島和雄は「明末長江デルタにおける土地經營」（歷史學研究 148, 昭和25年11月）によつて，華中養蠶業地帶の地主經營が，13・14世紀頃からの稻作技術體系の展開を背景にし，强い貨幣經濟の浸透の上に成立しているが，集權的國家支配と商品生產によつて解體せしめられた地主手作經營と理解されること，從つて雇傭形態による新しい勞働力體系をもちながら，富農的展開を生み出し得なかつたことを立論している。

2. 中國社會のギルドおよび家族

a　教授　仁井田陞

b　中國社會の內的實質的構成を明らかにするためには，單に人間結合の形式的構成や經濟機構ではなくて，社會構成を支えている法意識・倫理意識を明確にしなければならない。そしてその問題の窮極のねらいは過去の單なる傳統の研究ではなく，傳統を超えて進む東洋社會の質的變革過程である。

ヨーロッパのギルドはフランス革命期までには，既に實質的に終りをつげていたが，中國ではその工業水準の低さと民族資本の發展を阻んだ外的條件とは，ギルドをいつまでもかなりの程度に存續せしめて革命期に至らしめていた。この研究も昭和17年以來の數度の調査に基いている。もつとも東洋社會における自由意識の不成長は，中國のギルドの場合にも例外的ではない。しかしかかる點に質的差異がある

にもかかわらず，ツ　ツトツワングの傾向において，すべてギルド的な統制の點において，そして仲間だけの互助の精神において，ヨーロッパ中世ギルドに類したものをもつてきた。中國のギルドは今後その置かれた條件の變化を大きく反映するであろう。

中國において古い歴史をもつ家族主義的規範意識は，更に儒教によつて歪曲的に强化され，後にまでも牢固として拔き難い狀態にあつた。この閉鎖的な感性的社會意識は理性的な自由意識に對立する異質のものである。制度的改革と共に，前者から後者への轉化が實現して，始めて眞の社會變革であり人間改造となる。ところで中國では一般家產についてはヨーロッパ中世的な單獨相續制を成立せしめず，ローマの家族分裂のように細胞分裂を古くからくり返して，本家分家的な上下統屬關係の成立を制約した。かかる分裂は勢い農民の貧困化にも拍車をかけた。おくれた農民經濟はそれなりに一つの合理化をはかる。貧しい農民の間では雇農も役畜も利用できず勞働力の源泉はほとんどもつぱら家族勞働力である。農民の家族的法律——家長と家族，父と子，娘，養子，婿，嫁乃至は夫と妻などの諸關係は，かかる勞働力の繼續的把握，又はその支配をねらつて規律だてられてきた點が多い。中國社會の家父長的權威成立のモメントは，農村の現實構造の內に，その地盤をもつたものなのであり，人間解放つまり主體的條件の變革は，客體的條件の變革なしに實現することはほとんど不可能である。

仁井田教授の，ギルドとくに北京のギルドについての研究報告には「北京の工商ギルドとその沿革」(東洋文化研究所紀要 1，昭和18年12月)，「北京工商ギルドの宗教及び同鄕的結合」(近代中國研究，昭和23年10月)，「北京工商ギルドの職業倫理」(東洋文化1，昭和25年2月)，「北京ギルドの職人徒弟制度」(戸田博士還曆記念論集，昭和24年2月) など7種の論文がある。ギルド調査の結果，收集した資料は，尨大な分量に上り，くわしい報告はにわかに印刷できないので，前記諸篇をまとめた概要が近く公刊される豫定となつている(「中國の社會とギルド」と題して昭和26年11月刊)。又仁井田教授は，家族法についても「華北農村における家族分裂の實態」(東洋文化研究4，昭和22年6月)，「中國の家——家族勞働力の規律——」(東洋の家と官僚，昭和23年

12月),「中國法史における主婦の地位と鍵」(國家學會雜誌 61 の 4, 5, 昭和22年10, 11 月),「中國農村の離婚法慣習」(中國研究2, 昭和22年11月) 等の諸篇を公にしたが, その他の諸篇をも加えて中國農村家族法に關する體系的な一書も近く公刊する豫定となつている。研究員 (現講師) 築島謙三の「家族主義社會の道德——中國農村の調査結果をめぐつて——」は近く「東洋文化」誌上に登載の豫定 (東洋文化5, 昭和26年4月)。本篇は仁井田教授「東洋的社會倫理の性格」(東洋文化講座 3, 昭和 23 年 11 月) と共に, 中國における閉鎖的な感性的社會意識を檢討してその變革の問題に及んだものである。

3. 東洋における近代資本主義と國際關係

a 教授 植田捷雄, 助教授 (現教授) 川野重任

b 西洋諸國により强制的に近代國際社會の中へ編入された前期的帝國清國の支配層は, 舊體制を維持しようとしながらも, 部分的には, 徐々に近代國際社會に對して意識的に適應し始める。舊中國社會の解體が外からの要因に促進されてその速度を加え, 新たな社會層が遂に政治的に發言し始め, 社會的政治的變動を通じて權力を握れる新たな政治勢力が, 中國を代表して國際政治の主體として積極的に行動するに至るまでの「近代化」の長き過程は, 從來の外交史學上殘されたもつとも未開拓の, しかももつとも重要な研究分野である。阿片戰爭前の外政貿易の舊機構とその機能と, 及びそれらの變革過程がまず明らかにされねばならず, 又, 外からの壓迫に對する反撥, 妥協, 適應の織りなす複雜な行動傾向を解明し, 型乃至は段階を異にする社會の接觸面に特有な政治現象を追求しなければならない。更に, 舊秩序維持の爲の外國文明吸收に始まる國權回復運動の政治過程の諸樣相を分析し位置づけなければならない。

教授植田捷雄は次の諸論文において, 外國勢力の對華滲透過程とこれによつて生ずる中國の外國文明攝取の諸樣相を研究した。「英國東印度會社の對支活動」(國家學會雜誌 56 の 7 以下, 昭和17年7~10月),「支那の開國と國際法」(東洋文化研究 1, 昭和19年10月),「南京條約の研究」(國際法外交雜誌 45 の 3・4 合併號以下),「續南京條約の研究」(國際法外交雜誌 46 の 3, 昭和22年2月),「太平亂と外國」(國家學會雜誌

62 の 9 以下，昭和23年9月～24年3月)，「日本の開國と中國」(國際法外交雜誌 49 の 2 以下，昭和25年5～11月)，「東洋外交史概說——中國開國篇——」(日光書院，昭和 23 年 8 月)。鈴木中正(元助手，現愛知大學助教授)は，清代社會史，政治史研究の立場から「ネパールをめぐる清英關係の研究——乾隆期の廓爾喀遠征から阿片戰爭に至るまで」，「清とグルカ及び英領印度との關係——1814 年～1816 年のイギリス・グルカ戰爭當時における——」(東洋學報 32 の 1，昭和23年10月) を發表した。坂野正高(元助手，現東京都立大學助教授)は「阿片戰爭後における最惠國條款の問題」(東洋文化研究 6，昭和22年10月)，「外交交涉における清末官人の行動樣式」(國際法外交雜誌 48 の 4，6，昭和24年10，12月)において清國外政機構の機能機構の擔い手たる官僚層の行動傾向を明らかにした。助手衞藤瀋吉は「阿片戰爭前後における在華英國商人の政治的性格」において英清關係を中心とする中國貿易構造の展開を機能的に研究し，外交の經濟的基礎及び政治過程の考察に力を注いだ。

なお經濟學的研究として次の諸研究がある。助教授橋本秀一「南方地域の貿易事情」(東洋文化研究所紀要 1，昭和18年12月)，「中國の工業化問題」(東洋文化研究 10，昭和24年2月)。助教授(現教授)川野重任「南方原住民の經濟志向について」(東洋文化研究所紀要 1，昭和18年12月)，「再び南方原住民の經濟志向について」(國家學會雜誌 60 の 2，3，昭和21年2，3月)，「ファーニヴァル複合經濟論の構造と批判」(東洋文化 1，昭和25年2月)。

4. ユーラシアにおける文化交流

a 教授 江上波夫，教授 山本達郎

b 教授江上波夫は內蒙古オロン・スム遺跡の歷史的考古學的研究を行い，その遺跡が中世における東西交涉史上非常に重大な役割をもつた元代のキリスト教徒汪古族の王府址なることを明らかにし，そこに彼らが元來信奉したキリスト教たる景教の遺物のみならずその王ゲオルギス(クビライの外孫)の庇護のもとに東亞においてカトリック教の最初の傳道をなした，ローマ法王派遣の大司教モンテ・コルヴィノの建立した「ローマ教會」の遺跡の存在を確認した。「東アジアにおける最初の大司教モンテ・コルヴィノのローマ教會址の發見」(人文 3 の 2，昭和24年9月)は

この研究の報告の一部である。次に農民と遊牧民の關係を考古學上及び歴史學上より考究し，その概觀を「アジア・民族と文化の形成」（昭和23年5月），「歴史のあけぼの」（昭和24年5月）等に發表した。又，北方ユーラシアにおける民族の移動及び文化の交流の問題を中心に，それに關連した種々な問題を論考し，「ユウラシア北方文化の研究」として一書にまとめ，さきに發表した匈奴關係の論考「ユウラシア古代北方文化——匈奴文化論考」（昭和23年8月）につづくものとした。この書は近刊の豫定（昭和26年9月刊）。北方ユーラシア文化の東亜ことに日本への波及事實を考古學上より實證するため，本年夏期青森縣下北郡吹切澤遺跡を發掘し，そこに北歐を中心として東はシベリア，モンゴリア，滿鮮にまでひろがつたところの，いわゆる櫛目紋土器文化なる新石器時代狩獵民文化が，わが國本州の北端まで東漸した事實を確認した。助手山口修（現熊本大學講師）は「元朝祕史」に關する研究の前提的文献批判を行つた。

教授山本達郎は，インドシナ史の研究特に安南と中國との交渉，法制史上に中國の及ぼした影響の解明に努力した。本年6月刊行の「安南史研究Ⅰ」はその一部で，元明兩朝と安南との交渉の基礎的研究を集成したものである。安南の獨立過程（東洋文化研究所紀要 1，昭和18年12月），黎朝制度の諸研究を含めて，今後續刊の豫定。さらに最近「歴朝憲章類誌」，「黎朝刑律」の校訂をほとんど完成した。助手荒松雄は，16 世紀以後のヨーロッパとアジア社會との接觸交渉を解明し，アジア社會の近代化の前提的研究を企圖し，特にインドをとりあげている。

研究員飯田須賀斯（現東北大學教授）は，論文「中國建築の日本建築に及ぼせる影響」において，中國建築をディテイルについて歴史的地理的に研究し，その形式的內容的意義を明らかにし，その角度より日本建築に再檢討を加え，從來の通說を訂正すると共に，種々新しい問題を提起した。

5. 東洋における文化の諸形態

a　教授　飯塚浩二，教授　米澤嘉圃

b　各民族の文化がそれぞれに固有の特色を帶びていることはいうまでもないが，固有の特色といつても超時代的に固定しているわけのものではなく，獨自にまた他

の文化との接觸，對決の結果として，歴史的に變化する。文化の特質の說明はしばしば風土に求められようとしているが，文化の特質と地理的環境との關係も，環境の主體としての人間社會の——主として經濟史的な——發展に卽して理解されねばならぬ。教授飯塚浩二のこの問題についてかねて方法論的考察を進めてきた成果は，最近の「人文地理學」（昭和25年3月）にいたる一連の單行本にまとめられた。この觀點を前提としながら，異なる文化の交渉が，交渉兩當事者の經濟史的な發展につれて樣相を異にすることについての試論としては「ロシアと『東洋』との交渉」（東洋文化研究所紀要 1，昭和18年12月）がある。東西の文化を單に空間的に竝べて形態學的に比較するばかりでなく，世界史の一つの流れに組み入れて發展史的に諸文化を位置づける必要を感じて企てた概括的な素描は「比較文化論」（昭和23年2月）に收錄。さらに西洋ことに資本主義的な近代西洋の文化と東洋諸文化との對決の樣相を捉えようとした論考をまとめたものが「世界史における東洋社會」（昭和23年6月）である。以上は全體として，東洋における文化の諸形態とその變貌とをわれわれ自身の問題感覺から研究するために方法論的考察を重ねて來た過程の產物である。研究を特にわが國に集中したものとしては「日本の民主化についての覺書」（東洋文化講座1「近代日本の特異性」所收，昭和23年1月），「敗戰一年の實態調査的リポート」（比較文化論所收）その他があり，さらに對象を日本軍隊に特定して，將校出身學生との協力によつて分析を企てたのが最近の「日本の軍隊」（昭和25年12月）である。軍隊の研究は，軍隊には一國の文化の特質，少くもそのある側面が强調されて現われていて，文化の比較研究にすぐれた手がかりたり得るであろうとの見とおしをもつて進められ，他の適任な研究者の協力によつて，日本につづいて中國その他の東亞の諸國に及ぼされる豫定である。

古代及び中世のヨーロッパにおいては奴隷・農奴はもちろん，勞働に從事したものはすべて藝術の對象となり得なかつたといわれているが，中國では六朝以來淸朝の末に至るまで，傳統的に農民を題材とした繪畫が作られている。このことは，單に中國繪畫の特殊性を物語るにとどまらず，こうした特殊的作品を產出した中國の文化，社會の特殊性を示唆するものでなければならない。教授米澤嘉圃は，このよう

な見地から「中國繪畫における庶民——特に農民畫について」(東洋文化 2, 昭和25年5月) と題して, 中國歷代の農民畫——勸戒的農民畫, 農民風俗畫, 農業技術解說畫等の起源, 沿革を尋ね, 文化的社會的關連を探ることによつて, それら中國農民畫がもつ特殊性の根源を明らかにした。明末以降の一部の中國繪畫に, 西洋畫法の影響の認められることは周知の事實であるが, 從來はこれをもつて直ちに近代的萌芽の一表徵であるかの如く見なされていた。これに對して「中國近世繪畫と西洋畫法」(國華 685～688, 昭和24年4～7月) なる論文において, 各社會層に受容された陰影法, 遠近法等のいわゆる西洋畫法を分析し, それらはいずれも中國在來の傳統的畫法との便宜的な折衷に過ぎないことを明らかにし, 且つその發展をさまたげそれに抵抗した意識構造について考察した。

6. 東洋宗教の諸形態とその基盤

a 教授 結城令聞, 助教授 小口偉一

b 東洋における宗教的事象の一つの特徵は, 同一の基盤の上に成立宗教と民族宗教との混淆的な諸形態や民族宗教の諸形態が雜然として行われていることである。特に未開社會においては部族的信仰として自然發生的な信仰と儀禮とが行われている。通常これをアニミズムとか呪物崇拜として概括するような誤謬がおかされているけれども, 民族宗教にも, 文化接觸や混合による特殊的な諸形態が存するのであつて, 人種層や文化層を度外視して, 宗教形態を論ずることはできない。本研究はこのような視點から東洋宗教の形態を民族の層位的構造を考慮しつつ究明したものであつて, 元教授宇野圓空 (昭和17～21年在任, 昭和24年歿) は主としてインドネシヤの民族宗教を解明し, 助教授小口偉一は北方諸民族から南方諸民族に及ぶシャマニズムを考究し, 研究員 (現講師) 築島謙三はインドネシヤにおける呪術的行爲を檢討し, 一方教授結城令聞, 助教授窪德忠は成立宗教としての中國における佛教並びに道教の研究をなし, 助手高木宏夫は日本における民衆の宗教意識と呪術的慣習を分析した。方法としては民族學, 宗教社會學, 社會心理學等の立場のみならずひろく文化人類學の諸方法が適用された。宇野教授の研究は「マライシヤの宗教と民族文化」(南洋地理大系 5, 昭和17年5月) に概說された民族宗教の基礎問題を展開した

もので，「ダイヤク諸族における神祇觀念」(東洋文化研究所紀要 1，昭和 18 年12月)は從來看過されたボルネオ諸族の民族宗教の形態を文化層と文化圈との關係において探究したものである。すなわち，從來アニミズムとして概括された宗教形態を，諸部族の生業や生活樣式を基礎として把握し，觀念形態としての民族的神觀の特質を推定している。更に「村の祭祀と家の祭祀」(東洋文化研究 2，昭和21年9月) では農耕民族としての大陸南部の諸族の民族信仰を取上げ，インドネシヤ諸民族の信仰との比較をなし，農耕民族においては，戰爭や病氣に關する儀禮とか，祖先や守護神の祭祀などが，農耕儀禮に結合している事實を實證したものである。小口助教授は東洋の民族宗教の底流としてのシャマニズムの問題を，まず從來の文獻的研究の整理から着手し「シャマニズム的世界觀の問題」(東洋文化研究 8，昭和23年6月) でこれを原始的世界觀との關連において取扱つている。問題の提起としては，シャマニズムを物質文化や社會的諸關係の發展段階との對照において把握することに向けられているが，現在においてはその困難が豫想され，むしろシャマニズム研究としては，その系統の探究をなすべきことが示唆され，類同現象として，東洋宗教のカリマス的，傳統的形態の分析が「東洋社會の呪術的構造」(社會圈 2 の 6，昭和 23 年 6 月)，「權威信仰の構造」(人間 4 の 2，昭和 24 年 2 月) においてなされている。さらに現實問題との關連としては，「日本における宗教とファシズム」(東洋文化 2，昭和25年5月) がファシズム運動の根柢に横わるシャマニズム的傾向を分析して，宗教信仰の基盤の檢討を要請している。築島研究員 (現講師) は「思惟の原初的形式とその發展」(東洋文化研究 11，昭和24年5月) において，インドネシヤ諸族の土着醫療を手がかりとして，その心的機能の發展樣相を明らかにし，呪術的行爲とアナロギー的思惟の區別をなし，これに關連する象徵意識の問題の解明のために「言語表現における象徵意識の樣相」(東洋文化研究 3，昭和22年3月)，「象徵の考察」(心理學研究 2 の 1，昭和24年9月) 等を發表した。

結城教授は，「中國における庶民佛教」の研究において，中國淨土教が質的に庶民宗教となりえていない點を日本淨土教との比較によつて究明し，窪助教授は「道教と中國社會」(昭和23年5月)，「初期全眞教の一性格」(東方學 1，昭和25年12月) に

おいて，道教と民衆との關係を解明した。高木助手は「民衆の宗教」において特に日本における都市，農村，漁村の民衆の宗教意識と慣習を面接法によつて實證的に把握した。

---

c （全般にわたるもの）明治維新このかた，近代國家としての興隆を謳われて來たわが國ではあるが，この數年，ことに戰爭激化から敗戰後の今日にかけての事態の推移は，近代日本文化の實態がいかなるものであつたかについて，われわれに本質的な反省を求めている。そして同時に戰後の世界史の動向は，東洋諸民族の文化が新しい展望の下に再檢討さるべきことを教えている。この意味で，學問的に問題を整理し，研究を推進するために，研究所の主催により所内および所外から各分野の專門家たちの協力をえて，昭和 21 年 2 月以來約 60 回にわたつて續行された東洋文化講座がある。われわれの仕事が學界におよぼした影響をとわれるなら，その一つに，種を播いた仕事として，あえてこれを擧げたい。同講座が何を目ざした努力であつたかは，仁井田教授「東洋文化研究の課題と研究方向」（刊行した同講座第2卷跋）及び飯塚教授執筆の同講座第1卷の跋に明らかにされている。

B 研 究 報 告

（*印は著書　△印は譯書）

辻　直四郎

		卷	號	年	月
*バガヴァッド・ギーター ——古代印度宗教詩——	刀江書院			25	12
古代印度の婚姻儀式	東洋文化研究	11		24	5
史書なき印度の歴史	東洋文化	1		25	2

仁井田　陞

*中國の社會とギルド	岩波書店			26	12
北京の工商ギルドと其の沿革	東洋文化研究所紀要	1		18	12
清代の漢口山陝會館と山陝幇	社會經濟史學	13	6	18	9
北京の商工人と其の仲間的結合	法律時報	16	1	19	1

北京回教徒商工人と其の仲間的結合	回教圏	8—6	19—8
金代刑法考	東洋史研究	1—1,2	19—8,10
支那近世の一田兩主慣習と其の成立	法學協會雜誌	64—3,4	21—3, 4
華北農村に於ける家族分裂の實態	東洋文化研究	4	22—6
中國法史に於ける主婦の地位と鍵	國家學會雜誌	61—4,5	22—10,11
中國農村の離婚法慣習	中國研究	2	22—11
中國人の言語表現に見る倫理的性格	新中國	2—9	22—11
支那近世同族部落の械鬪	小野博士記念「東洋農業經濟史研究」		23—5
北京工商ギルドの宗教及び同鄉的結合	仁井田陞編「近代中國研究」		23—10
東洋的社會倫理の性格	東洋文化講座	3	23—11
中國の家 ——中国農村家族労働力の規律——	「東洋の家と官僚」		23—12
北京ギルドの職人徒弟制度	戸田博士記念「現代社會學の諸問題」		24—2
道教信仰と神判	オリエンタリカ	2	24—2
北京工商ギルドの職業倫理	東洋文化	1	25—2
中國の新婚姻法について	法律時報	23—1	26—1
中國社會の「封建」とフューダリズム	東洋文化	5	26—2
中國の新離婚法	比較法研究	2	26—5
中國農村社會と家父長權威	仁井田陞編「近代中國の社會と經濟」		26—3
中國の法思想史	法律學體系（法學理論篇）	2—11	26—8
中國農村社會の家族共產制	東洋文化研究所紀要	2	26—9

（以下未發表）

中國の農村家族（單行本として印刷中）

飯塚浩二

*地理學批判	帝國書院	22—3
*世界史における東洋社會	每日新聞社	23—6
*比較文化論	白日書院	23—2
*人文地理學說史	日本評論社	24—3

*人文地理學	有斐閣		25—3
*日本の軍隊	東大出版部		25—12
*東洋の文化	福村書店		26—7
*日本の精神的風土	岩波書店		27—2
アメリカ文化とヨーロッパ文化，その類似と相異とについて	思想	256～258	18-9,10,11
ロシアと「東洋」との交渉（一）	東洋文化研究所紀要	1	18—12
地理學の在り方	日本諸學	5	19—12
東洋的文化の變貌	東洋文化研究	2	21—9
中國の秘密結社	世界評論		22—11
遊牧民の制覇と隊商商業	歴史學研究	132	23—3
思想の世代的斷層	中央公論	732	25—4
外國人による日本文化研究の效用	思想	332	27—2

（以下未發表）

ロシアと「東洋」との交渉　續篇（未發表のまま組版中に戰災燒失）

江上波夫

*アジア・民族と文化の形成	野村書店		23—5
*ユウラシア古代北方文化	全國書房		23—8
〃（再版）	山川出版社		25—7
*ユウラシア北方文化の研究	山川出版社		26—9
馬弩關と匈奴の鐵器文化	民族學研究	12—3	23—1
北方ユウラシヤ民族の葬禮に於ける弯面・截耳・剪髮について	學藝	36	23—3
黎明期のアジヤ	史學	23—2	23—6
內蒙の巨刹貝子廟の實態	オリエンタリカ	1	23—8
アイヌのチャシとロシアのゴロデイシチエ	民族學研究	13—3	24—2
	八學會連合編「人文科學の諸問題」		24—11
日本民族文化の源流と日本國家の形成（對談と討論）	民族學研究	13—3	24—2
東アジアに於ける最初の大司教モンテ・コルヴィノの「羅馬教會」阯の發見	人文	3—2	24—9

中國古代の札甲にいて	日本考古學協會第5回總會記事		25— 5
青森縣吹切澤遺跡について	日本考古學協會第6回總會記事		25—10
日本古代國家の形成	東洋文化	6	26— 9
オングト部における景教の系統とその墓石	東洋文化研究所紀要	2	26— 9

結城令聞

教行信證の信卷別撰についての私見	宗教研究	122	24—10
空思想と淨土教	宗教研究	123	25—10
唯識二十論の背景思想とその製作についての梗概	東洋文化研究所紀要	2	26— 9
敦煌文書による攝論宗義の研究	東方學	3	27— 1

（以下未發表）

唯識學文獻總目錄（著書）

世親の唯識思想（著書）

教行信證に於ける信卷別撰論攷（雜誌論文，印度學佛教學研究 1 — 1，5 月刊）

植田捷雄

*支那租借地論	日光書院		18— 8
*東洋外交史概說	日光書院		23— 8
*日華交涉史	野村書店		23— 9
阿片戰爭論	國際法外交雜誌	42-1,2,3	18-1,2,3
支那に於ける基督教宣教師の法律的地位	東洋文化研究所紀要	1	18—12
支那の開國と國際法	東洋文化研究	1— 1	19—10
南京條約の研究	國際法外交雜誌	45-3・4,5・6	21-3,5
續南京條約の研究	〃	46— 3	22— 2
第一次大戰に於ける日本の參戰外交	仁井田陞編「近代中國研究」		23—10
太平亂と外國	國家學會雜誌	62—9,12 63-1・2・3	23—9,12 24— 3
日本の開國と中國	國際法外交雜誌	49-2,4,5	25-5,9,11

大正4年日華二十一箇條條約と滿洲事變	植田捷雄編「現代中國を繞る世界の外交」		26— 6
阿片戰爭と清末官民の諸相	國際法外交雜誌	50— 3	26— 7
琉球の歸屬を繞る日清交涉	東洋文化研究所紀要	2	26— 9
日獨伊三國同盟の締結とその目的	東洋文化	8	27— 2
日獨防共協定の强化と軍の外交干與	愛知大學法經論集	4	27— 3

米澤嘉圃

中國近世繪畫と西洋畫法	國華	685～688	24—4～7
中國繪畫における庶民	東洋文化	2	25— 5
阜の形象——黃土山水畫源流考——	美術史	1	25— 4
院體花鳥畫の變遷	三彩	49	12—25

（以下未發表）

Painting of Sung and Yüan Dynasties

（島田修二郎と共著，27年4月，龍泉堂刊）

川野重任

小作關係より見たる北支農村の特質	東亞研究所「支那農村慣行調査報告書」	1	18—10
南方原住民の經濟志向に就て	東洋文化研究所紀要	1	18—12
東亞農業再編成の一問題	國際經濟研究		19— 7
佛印の社會と農業	大東出版社「續南方の民族と經濟」		19—12
再び南方原住民の經濟志向に就て	國家學會雜誌	60— 2,3	21— 2
東南亞細亞に於ける大土地所有の形成とその經濟的機能	東洋文化研究	3	22— 3
現下「農村景氣」の實態と前途	農村評論		22— 3
新東亞と日本農業	東洋文化研究	7	23— 2
ファーニヴァル「複合經濟論」の構造と批判	東洋文化	1	25— 2
資本蓄積と農業	農業經濟研究	24— 2	26— 8
農村人口問題の經濟理論的性格に關する覺書	東洋文化	8	27— 2
經濟自立と農業	思想		27— 1

石田英一郎

（以下未發表）

對馬豆酘村の信仰習俗（古今書院刊「對馬の自然と文化」）

山本達郎

*安南史研究 I	山川出版社		25—6
明の安南經略	日本諸學研究報告	17	
モン族に關する歴史的研究 ——特に Dvaravati に就いて——	史學雜誌	53—9	17—9
占城のヴィヂャヤ遷都の年次に就いて	南アジア學報	1	17—12
安南西都の遺跡	考古學雜誌	33—1	18—1
競渡考	東洋史研究	8—1	18—1
墮和羅國考	史林	28—4	18—4
多羅磨國考	史學雜誌	54—7	18—7
安南が獨立國を形成したる過程の研究	東洋文化研究所紀要	1	18—12
ムハンマド・トゥグルクの宗教政策 ——回教君主インド統一の課題——	人文	2—2	23—7
越史略と大越史記	東洋學報	32—4	25—4

橋本秀一

南方貿易の綜合研究	經濟學論集	12—8	17—8
大陸物價の動向と對策	〃	13—6,8	18—6,8
南方地域の貿易事情	東洋文化研究所紀要	1	18—12
中國の工業化問題	東洋文化研究	10	24—2

小口偉一

東洋社會の呪術的構造	社會圏	2—6	23—6
シャマニズム的世界觀の問題	東洋文化研究	8	23—6
權威信仰の構造	人間	4—2	24—2
日本における宗教とファシズム	東洋文化	2	25—6

（以下未發表）

本邦巫俗の研究

周藤吉之

宋代の佃戸制	歴史學研究	143	25—1
宋代莊園の管理	東洋學報	32—4	25—4
宋代官僚制と大土地所有	社會構成史大系	8	25—8
宋代の鄉村に於ける小都市の發展	史學雜誌	59-9,10	25—9,10
宋金時代の莊園と佃戸についての一考察	東方學	2	26—8
五代節度使の牙軍に關する一考察	東洋文化研究所紀要	2	26—9
五代に於ける均稅法	「和田博士還曆記念東洋史論叢」		26—11

（以下未發表）

宋代に於ける莊園制の發展（オリエンタリカ 3，未刊）
五代節度使の支配體制（史學雜誌 61 — 4，6）

窪德忠

*道教と中國社會	平凡社		23—5
王重陽の遇仙說話に就いて	東亞論叢	6	23—5
初期全眞教の一性格	東方學	1	26—3
道教の清規について	東方宗教	1	26—12
金元時代の道教教團の性格	「和田博士還曆記念東洋史論叢」		26—11

（以下未發表）

王重陽の研究
全眞教團の成立と邱長春
中共の宗教政策と民衆道教

松本善海

*世界の歴史——東洋——	毎日新聞社		24—12
舊中國社會の特質論への反省	東洋文化研究	9	23—9
舊中國國家の特質論への反省	東洋文化研究	10	24—2
鄉鎭制度——中國における地方自治制度近代化の過程・序章	仁井田陞編「近代中國研究」		23—10

中國における地方自治制度近代化の過程 ——國民政府による——	仁井田陞編「近代中國の社會と經濟」		26— 5
秦漢時代における村落組織の編成方法について	「和田博士還曆記念東洋史論叢」		26—11

（以下未發表）

秦漢時代における亭の變遷（東洋文化研究所紀要 3）

關野　雄

黒陶明器特集	三彩	56	26—12

（以下未發表）

河南省輝縣における殷墓と戰國墓の發掘（考古學雜誌 37 — 6）

泉　靖一

北海道移住民の人類學的研究	明治大學政經論叢	3— 4	27— 3

（以下未發表）

沙流アイヌの地緣集團における Iwor（民族學研究 16 の 3, 4）

西嶋定生

支那初期棉業の成立とその構造	オリエンタリカ	2	24— 3
明代に於ける木棉の普及について	史學雜誌	57- 4,5,6	23— 4,5
16・17世紀を中心とする中國農村工業の考察	歷史學研究	137	24— 1
中國古代帝國形成の一考察	歷史學研究	141	24— 9
漢代の土地所有制	史學雜誌	58— 1	24— 6
古代國家の權力構造	歷史學研究會編「國家權力の諸段階」		25—10
火耕水耨について	「和田博士還曆記念東洋史論叢」		26—11

築島謙三

△J・M・クーパー人間はいかに進化したか ——身體と心理について——	刀江書院		26— 5
未開人と舞踊 ——律動の觀點に立つて——	民族學研究	2—2,3	19— 3
言語表現に於ける象徵意識の樣相	東洋文化研究	3	22— 3
人間の世界と動物の世界 ——社會の二つの類型——	知性		24— 1

思惟の原初的形式とその發展	東洋文化研究	11	24—5
象徴の考察	心理學研究	20—1	24—9
文化の超有機體說に對する心理學的考察	民族學研究	15—1	25—8
White, Leslie A., The Science of Culture, a Study of Man and Civilization, 1949 論評	民族學研究	15—3,4	26—3
言語發達と社會心理	國語教育講座	2	26—3
家族主義社會の道德——中國農村の調査結果をめぐつて——	東洋文化	5	26—4
現代進化論論議の焦點	譯書「人間はいかに進化したか」附錄		26—5
言語の形成に與る心的機能	國語學	8	27—1

(以下未發表)

バレエ語概說(セレベスのトラヂヤ族の言語)
カロ・バタク語概說(スマトラのバタク族の一方言)
南方原住民の土着醫療を通じて見た思惟の研究
南方原住民の政治體制
(トラヂヤ族,ミナンカバウ族,ジヤワのデサ及び土侯領,マサカル,ブギ,ニアスの諸民族について)
漁民の俗信
進化論的思考の發展と心理學

荒松雄

16・7世紀における エスパニアのアジア貿易	歴史學研究	149	26—1
インド村落共同體研究についての覺書——19世紀における イギリス人による諸論考——	東洋文化研究所紀要	2	26—9
アジアの社會	世界地理大系	5	27—2

(以下未發表)

フィリピン側史料による明史呂宋傳補註

花村芳樹

△ウィリアム・ヴォート 生き殘る道(飯塚教授と共譯)	トツパン		25—8

(以下未發表)

後進國の經濟構造 ——ポーランドを中心に—— (助手論文)

衞藤濬吉

（以下未發表）

阿片戰爭以前における英國商人の性格（助手論文，東洋文化研究所紀要 3）
英國初期對清國政策の一面——阿片合法化問題を中心にして——（助手論文）

小堀巖

滿洲族薩滿の祭祀を見て ——黑河省瑷琿縣大五家子村の場合——	民族學研究	14—1	24—10
滿洲に於ける民族複合現象の一例 ——滿洲屯とオランハルガノ——	新地理	3—6	24—10
條里制施行の地理的基礎	「人文科學の諸問題」		24—10
瑷琿附近の滿洲族の言語について	民族學研究	14—2	24—12
八學會の對馬調査は どのようにして行われたか	人文	1—1	26—5
中國の社會	世界地理大系		27—3

（以下未發表）

中國地理學史研究 (一) ——民國以後を中心として——（助手論文，東洋文化研究所紀要 4）
遊牧社會における中國商人の機能（ユーラシア學會報告Ⅱ）

古島和雄

明末長江デルタにおける地主經營	歷史學研究	148	25—11
中世における民族の問題	歷史學研究會編「歷史における民族の問題」		26—12

（以下未發表）

補農書の成立とその地盤（東洋文化研究所紀要 3）
中國中世の寄生地主制とその展開（助手論文）

堀敏一

中國における封建國家の形態	歷史學研究會編「國家權力の諸段階」		25—10
唐末諸叛乱の性格 ——中國における貴族政治の沒落について——	東洋文化	7	26—11

（以下未發表）

宋朝政權の軍事的基礎——禁軍の成立過程——（助手論文）

小倉芳彦

（以下未發表）

孔子の人柄について（助手論文）

高木宏夫

日本人の宗教 ——伊豆須崎の調査報告——	思想の科學	6—1	26—4
嚴原における宗教呪術	人文	1—1	26—5

佐伯有一

（以下未發表）

中國近世絹織物業攷（歴史學研究叢書刊行豫定）

宮川透

「西田哲學」の史的構造分析 ——その位置付けのための試論——	東洋文化	8	27—2

（以下未發表）

「大正文化」批判の課題 ——特に三木哲學の史的構造分析——（東洋文化研究所紀要3）

C 東洋化研究所紀要

第1冊（昭和18年12月）

ロシアと「東洋」との交渉 (一)……飯塚浩二

安南が獨立國を形成したる過程の研究……山本達郎

支那に於ける基督教宣教師の法律的地位……植田捷雄

南方地域の貿易事情……橋本秀一

北京の工商ギルドと其の沿革（初篇一）……仁井田陞

ダイヤク諸族に於ける神祇觀念 (一)……宇野圓空

南方原住民の經濟志向に就て……川野重任

羅教について ——清代支那宗教結社の一例——……鈴木中正

第2冊（昭和26年9月）

五代節度使の牙軍に關する一考察

——部曲との關聯において——……周藤吉之
中國農村社會の家族共產制……仁井田陞
インド村落共同體研究についての覺書
——十九世紀におけるイギリス人による諸論考——……荒松雄
琉球の歸屬を繞る日清交涉……植田捷雄
唯識二十論の背景思想とその製作についての梗概……結城令聞
キヤンとボルヂギン ——元朝祕史覺書 その一——……山口修
オングト部における景教の系統とその墓石……江上波夫

Ⅶ 研究活動

A 研究會

(研究所内において原則として毎週少くとも一回開催)

昭和22年

第1回(1月22日)	中國における社會的倫理の性格	仁井田陞
	清朝の儉約令の政策的意義	鈴木中正
第2回(2月4日)	支那の工業化	橋本秀一
第3回(2月25日)	戰後の一農村より	鈴木忠和
第4回(2月27日)	農地制度の諸問題	川野重任
第5回(3月4日)	風害の構造	川田信一郎
第6回(3月11日)	北鮮より歸りて	鎌田正二
第7回(5月6日)	アジア的なるものとアジア的生產樣式	幼方直吉
第8回(5月20日)	極東國際裁判について	植田捷雄
第9回(5月27日)	ロスの「日本のジレンマ」	鶴見和子
第10回(6月3日)	エスパニア人のフィリピン貿易	荒松雄
第11回(6月10日)	世界史と遊牧民 ——成吉思汗の覇業の社會經濟的基礎——	飯塚浩二

第12回（6月24日）未開思惟の問題……築島謙三
第13回（7月1日）華語の問題……魚返善雄
第14回（7月4日）いわゆる東洋的社會について……鞍田純
第15回（10月7日）日本農政の主體……鈴木忠和
第16回（10月21日）戰時中の中國文學……竹内好
第17回（11月25日）遊牧民の性格……江上波夫
第18回（12月2日）米國新着雜誌の紹介……山本達郎
第19回（12月16日）近世中國の國內商業……藤井宏
第20回（12月23日）呪的社會構成――マクス・ウェーバーにおけるカリスマの問題――……小口偉一

昭和23年

第21回（1月20日）根岸佶博士著「中國社會に於ける指導層」への批判……松本善海
第22回（1月27日）馬と中國古代文化……石田英一郎
第23回（2月3日）西洋近代畫と明治以降の日本畫壇……吉川逸治
第24回（2月10日）新東亞に於ける日本農業の地位……川野重任
第25回（2月17日）山水畫と風水論……米澤嘉圃
第26回（2月24日）パラオ島民の法的秩序……杉浦健一
第27回（3月1日）朝鮮雜感……高橋幸八郎
第28回（3月9日）終戰直後の朝鮮……鵜飼信成・有泉亨
第29回（3月16日）アメリカ最近の社會科學研究の現狀……南博
第30回（3月23日）中國內戰の新段階……田代正夫
第31回（3月30日）Hsien Chin Hu 著「中國人の顏の觀念」の紹介……築島謙三
第32回（4月20日）印度の結婚式……辻直四郎
第33回（4月27日）漁業における資本主義の發達……小沼勇
第34回（5月4日）米華通商航海條約と

在華米國會社の法的地位……植田捷雄

第35回（5月11日）鑛山における勞働者集團としての女子……松島靜雄

第36回（5月18日）漁業の發達と漁業制度……久宗高

第37回（5月25日）清末における嶺南の儒風……麓保孝

第38回（6月1日）現代心理學の理論的展開……相良守次

第39回（6月8日）東洋に於ける經濟開發とその歸結——ユージン・ステーレー「東洋の經濟開發に於ける二つの問題」を中心に——……川野重任

第40回（6月22日）浮浪兒の實態とその保護……大宮錄郎

第41回（6月29日）チンギス・ナーメの說話……小林高四郎

第42回（7月13日）東洋文化研究の今後の方向についての討論會

第43回（9月21日）中國古代帝國形成の一考察……西嶋定生

第44回（9月28日）清末對外交涉のメカニズム——1854年の條約改正交涉を中心とした一考察——……坂野正高

第45回（10月12日）佛教と道教との交涉……窪德忠

第46回（10月26日）黎明期の日本……江上波夫

第47回（11月9日）中國の農村と日本の農村……福武直

第48回（11月16日）京都大學東洋史談話會（11月7日）および人文科學委員會第2部（史學）大會（11月11・2・3日於京都）の報告を中心として……西嶋定生・江上波夫

第49回（11月26日）中國における水利灌漑……今堀誠二

第50回（11月30日）古典古代の社會……村川堅太郎

第51回（12月14日）宋代の莊園制……周藤吉之

昭和24年

第52回（1月25日）中國工商ギルドの職業倫理……仁井田陞

第53回（2月8日）將門の叛亂——古代末期叛亂の特質——…石母田正

第54回（2月15日）清代商人の一性格……里井彦七郎
第55回（3月 8日）コーカサス見聞談……吉田金一
第56回（3月15日）ソヴェート經濟・理論と現實 ——シベリアより歸りて——……天澤不二郎
第57回（4月15日）中國解放地區の新文化……島田政雄
第58回（4月22日）研究課題についての討論會
第59回（5月 6日）島田虔次著「中國に於ける近代思惟の挫折」について……後藤基巳
第60回（5月13日）近代性の反省……山本達郎
第61回（5月20日）佛教と近代精神……中村元
第62回（5月27日）日本軍隊の一分析……飯塚浩二
第63回（5月31日）日本における近代的思惟……まつしま・えいいち
第64回（6月10日）日本古代文學における女性の地位……西郷信綱
第65回（6月17日）日本の傳統・近代精神・キリスト教……H. デュモリン
第66回（6月24日）中國近世史の課題……松本善海
第67回（9月24日）中國繪畫における庶民……米澤嘉圃
第68回（10月14日）アメリカ人文科學使節團報告をめぐつて……築島謙三
第69回（10月21日）インドシナ諸國の王權の性格について……山本達郎
第70回（10月28日）明治維新と國際情勢……遠山茂樹
第71回（11月11日）中國經濟に關する一試論……大橋育英
第72回（11月18日）華北に於ける農業技術の水準……福島要一
第73回（11月28日）華南農村の性格……天野元之助
第74回（11月29日）華北村落における土地と人……旗田巍
第75回（12月 9日）黃河治水の變遷 ——特に技術と政策を中心に——……安藝皎一
第76回（12月16日）黃土の土壤學……菅野一郎

昭和25年

第77回（1月20日）　北海道移住民の變容……泉　靖一
第78回（1月27日）　後進國の經濟發展と人口　——ノートシュタインの理論を中心として——……川野重任
第79回（2月10日）　毎日新聞社「世界の歴史・東洋」合評會
第80回（2月17日）　日本の開國と中國……植田捷雄
第81回（2月24日）　中國の農村家族……仁井田陞
第82回（3月 3日）　山村の社會心理學的考察　——長野縣諏訪郡湖南村後山部落の例——……築島謙三
第83回（3月10日）　神道とシャマニズム……小口偉一
第84回（3月17日）　日本の人口問題……館　稔
第85回（3月24日）　考古學上よりみたるアーリア文化の問題……江上波夫
第86回（4月14日）　「人々の哲學」について……飯塚浩二
第87回（4月21日）　中共土地政策の二つの時期……村松祐次
第88回（4月28日）　橋樸氏「中國革命史論」について……花村芳樹
第89回（5月12日）　後進國の經濟開發……橋本秀一
第90回（5月19日）　中國における職人ギルドについて……今堀誠二
第91回（5月26日）　アメリカにおける文化人類學と社會心理學……岸本英夫
第92回（6月 9日）　インド村落共同體研究のメモ……荒松雄
第93回（6月16日）　臺灣民族抗日運動史……向山寛夫
第94回（6月23日）　アメリカをめぐりて……松本馨
第95回（6月30日）　草原の英雄敍事詩……山口修
第96回（7月 7日）　日本ナショナリズムの諸問題……丸山眞男
第97回（9月15日）　對馬調査旅行談……小口偉一・小堀巖・高木宏夫
第98回（9月22日）　アメリカにおける東洋研究の動向……川島武宜
第99回（9月28日）　尻屋崎遺跡發掘報告……江上波夫
第100回（10月 6日）　Macrolinguistics and Microlinguistics……江實
第101回（10月13日）　宋代官僚制と大土地所有……周藤吉之

第102回(10月20日)　綜合科學史の構成……湯淺光朝
第103回(10月27日)　「家族共同體」について……布村一夫
第104回(11月10日)　松田智雄著「イギリス資本と東洋」をめぐる二三の問題……衞藤瀋吉
第105回(11月15日)　板野長八氏を圍む會
第106回(11月17日)　西洋中世世界の成立……增田四郎
第107回(11月24日)　庶民宗教としての中日淨土教の相違……結城令聞
第108回(12月 1日)　史記游俠列傳に關する二三の問題……增淵龍夫
第109回(12月 6日)　チベットの近況……木村肥佐生
第110回(12月 8日)　中國における「封建」とフューダリズム……仁井田陞
第111回(12月15日)　中國史における根本的一疑問……藤井宏

昭和26年

第112回(1月19日)　孔子……小倉芳彥
第113回(1月26日)　ソクラテスとアテナイの民主政について……太田秀通
第114回(2月 2日)　中國の木刻畫……內山完造
第115回(2月 9日)　道教教團の性格
——特に金元時代について——……窪德忠
第116回(2月16日)　眞宗の發展と一向一揆……笠原一男
第117回(2月23日)　近代の北支農村……佐野利一
第118回(2月27日)　ミシガン大學日本研究所の活動狀況……ジョウ・山極
第119回(3月 2日)　中國系建築樣式の傳播……飯田須賀斯
第120回(3月 9日)　中國政治史上における王朝交替……松本善海
第121回(3月16日)　唐末諸叛亂の性格……堀敏一
第122回(3月23日)　殷墟に關する最近の發見……貝塚茂樹
第123回(4月13日)　地代決定における經濟的と政治的
——經濟外强制論の批判をかねて——……川野重任
第124回(4月20日)　義和團事件と孫文……江口朴郎

第125回(4月27日)　婚姻法を通じて見たるソ連の社會構造……福　島　正　夫
第126回(5月11日)　南洋華僑資本の性格……内　田　直　作
第127回(5月18日)　日支の近代化と國際法……植　田　捷　雄
第128回(5月25日)　中國經濟發展の量的把握について……石　川　滋
第129回(6月 1日)　東洋ということばの使い方について……飯　塚　浩　二
第130回(6月 8日)　清國總理衙門の成立 ——開國による外政機構の形成——……坂　野　正　高
第131回(6月15日)　中國地理學史の課題……小　堀　巖
第132回(6月19日)　中國における宗教の現狀……W. シッファー
第133回(6月26日)　チベット叢談……西　川　一　三
第134回(6月29日)　後進國の經濟構造 ——ポーランドを中心に——……花　村　芳　樹
第135回(7月 6日)　文化人類學と心理學……築　島　謙　三
第136回(7月10日)　アメリカ旅行談……相　良　守　次
第137回(7月13日)　謝冰心女士を圍む會
第138回(7月17日)　香港大學教授 S. カービー氏を圍む會
第139回(9月21日)　宗教形態の發展・變化について ——宗教學說における進化主義と反進化主義——…小　口　偉　一
第140回(9月28日)　日本宗教の特質……高　木　宏　夫
第141回(10月 5日)　西田哲學の構造分析……宮　川　透
第142回(10月12日)　明治末道德教育の政治思想史的考察——家族國家論の形成過程を中心として——…石　田　雄
第143回(10月19日)　ソヴェート言語學の發展 ——スターリンの批判を中心として——……坂　本　是　忠
第144回(10月26日)　いわゆる「カントリイ・トレイド」について……衞　藤　瀋　吉
第145回(11月 2日)　中國的佛教の成立……結　城　令　聞

第146回(11月 9日)　人類社會結合の基本樣式について……石田英一郎
第147回(11月16日)　契丹文字の解讀について……村山七郎
第148回(11月30日)　第二次大戰下における中國社會の變貌……平等文成
第149回(12月 7日)　中國における異端思想の系譜……山本秀夫
第150回(12月14日)　米國における日本研究……M. ジャンセン

昭和27年

第151回(1月18日)　日本上代彫刻の二樣式……米澤嘉圃
第152回(1月29日)　中國中世の寄生地主制……古島和雄
第153回(2月 5日)　日本官僚研究豫報……泉靖一
第154回(2月15日)　漁業勞働關係の分析 ——以西底曳網漁業の調査より——……潮見俊隆
第155回(2月22日)　「家」と「氏」とに關する若干の問題提起 ——「氏の變更」を通して——……唄孝一
第156回(2月29日)　西ヨーロッパの村落共同體について……柴田三千雄
第157回(3月 7日)　近世中國の絹織物業……佐伯有一
第158回(3月14日)　內陸アジア社會の停滯と發展……山田信夫
第159回(3月18日)　戰國尺の發見……關野雄
第160回(3月25日)　米國におけるロシア研究……モートン
第161回(3月28日)　日本戰後ナショナリズムの一形態……藤原弘達

B　東洋文化講座

(原則として毎週一回開催，19頁參照)

昭和21年

第1講(2月16日)　東洋的社會とデモクラシー……飯塚浩二
第2講(2月23日)　米國最近の對華政策……植田捷雄
第3講(3月 2日)　東亞農業發展の基本型と日本農業の課題……川野重任
第4講(3月 9日)　北京ギルドの現狀……仁井田陞
第5講(3月23日)　「近代」日本の經濟精神……張漢裕
第6講(3月30日)　東洋の近代化と宗教……宇野圓空

第7講（4月6日）孫文と政治教育……丸山眞男
第8講（5月4日）科學者と祖國……飯塚浩二
第9講（5月11日）東洋的社會における社會規範の意識……川島武宜
第10講（5月18日）日本における民主革命の歴史的基礎……信夫清三郎
第11講（6月1日）東洋文化研究の回顧と展望……山本達郎
第12講（6月8日）インド人の政治思想……中村元
第13講（6月15日）西洋美術史の立場よりみたる西洋學の成立…吉川逸治
第14講（10月12日）「封建的」と「近代以前的」……大塚久雄
第15講（10月19日）終戰後における在華日本權益の處理とその將來……植田捷雄
第16講（10月26日）日本の社會と自由主義……木村健康
第17講（11月2日）華北農村における分家の實態……仁井田陞
第18講（11月11日）中國人と宗教……吉川幸次郎
第19講（11月16日）近代日本內政の特質……岡義武
第20講（11月30日）勞働組合運動の課題……古閑正元
第21講（12月7日）土地改革と農村の協同組合……近藤康男

昭和22年

第22講（1月25日）日本社會政策思想史……大河內一男
第23講（2月8日）日本ブルジョア民主主義運動史……平野義太郎
第24講（2月15日）舊大陸文化とアメリカ文化……飯塚浩二
第25講（2月22日）經驗の學と權威の學 ——農學史を中心として——……古島敏雄
第26講（4月26日）古代國家の精神構造……藤間生大
第27講（5月10日）神國觀念の歴史的系譜……石母田正
第28講（5月17日）尊王攘夷思想とナショナリズム……遠山茂樹
第29講（5月31日）日本思想史學の回顧と展望……家永三郎
第30講（6月7日）神政政治の終焉……小口偉一

第31講（6月21日）絶對主義と農民問題……服部之聰
第32講（6月28日）日本ファシズムの思想と運動……丸山眞男
第33講（10月 4日）三民主義，その形成と發展……岩村三千夫
第34講（10月11日）西洋および支那における帝王傳記……上原專祿
第35講（10月18日）日本の勞働關係の特質……磯田進
第36講（10月25日）アジア的なるものの追究……幼方直吉
第37講（11月 1日）中國の秘密結社……飯塚浩二
第38講（11月15日）魯迅の歩いた道——中國における近代意識の形成——……竹內好
第39講（11月29日）東洋的社會倫理の性格……仁井田陞
第40講（12月 6日）儒教批判の歴史……野原四郎
第41講（12月13日）東インドの社會構造……小林良正

昭和23年

第42講（1月31日）ソ連の二ケ年……福島正夫
第43講（2月 7日）二つの蒙古 ——外蒙人民共和國より還りて——……磯野誠一
第44講（5月 8日）哲學範疇論 ——アジア的社會と實存哲學——……山崎謙
第45講（5月15日）病態心理學からみた現在の日本社會……島崎敏樹
第46講（5月29日）日本人の思考樣式……宮城音彌
第47講（6月 5日）中國の民族道德……平野義太郎
第48講（6月12日）農民の思想家——安藤昌益と二宮尊德——……奈良本辰也
第49講（6月19日）日本における農民戰爭……服部之總
第50講（10月 2日）アメリカ人のみた日本人の社會心理……南博
第51講（10月 9日）社會倫理の轉換……飯塚浩二
第52講（10月23日）東洋的社會における停滯性の問題——中國を中心として——……松本善海

第53講（11月 6日） 複　合　社　會　論……川　野　重　任
第54講（11月20日） 生產關係よりみたる中國の都市と農村……今　堀　誠　二
第55講（11月27日） 東京裁判と日本のファシズム……戒　能　通　孝
第56講（12月18日） Democracy in America and Japan…Edwin O. Reischauer

東洋文化講座既刊內容

第1卷　近代日本の特異性（昭和23年1月刊）

近代日本政治の特異性……岡　義　武
日本の社會と自由主義……木　村　健　康
日本の民主化についての覺え書……飯　塚　浩　二
跋……飯　塚　浩　二

第2卷　尊攘思想と絕對主義（昭和23年5月刊）

尊攘思想とナショナリズム……遠　山　茂　樹
絕對主義と農民問題……服　部　之　總
日本ファシズムの思想と運動……丸　山　眞　男
跋……仁井田陞・飯塚浩二

第3卷　東洋的社會倫理の性格（昭和23年11月刊）

中國の近代と日本の近代……竹　內　好
中國人と宗教……吉川幸次郎
胡適氏と儒教……野　原　四　郎
東洋的社會倫理の性格……仁　井　田　陞
跋……飯　塚　浩　二

第4卷　戰後のソ連社會（昭和24年2月刊）

戰後のソ連社會……福　島　正　夫
跋……飯　塚　浩　二

C　東洋文化研究會議

主催者　岩井大慧（東洋文庫）

結城令聞（東方文化學院）
仁井田陞（東洋文化研究所）
飯塚浩二（東洋文化研究所）
小野忍（中國文學研究會）
平野義太郎（中國研究所）
岩村忍（中國研究所）
幼方直吉（中國研究所）
野原四郎（中國研究所）

第1回（昭和22年11月7・8日）　（會場　東洋文庫）

第1日「東洋の家」　議長……飯塚浩二
印度の家……中村元
中國の家……仁井田陞
イスラムの家……岩村忍
日本の家……川島武宜

第2日「東洋の官僚」　議長……仁井田陞
歐米の官僚……鵜飼信成
中國に於ける官僚批判の文學……小野忍
中國の官僚……和田清
日本の官僚……中村哲

右の報告・討論は「東洋の家と官僚」と題して昭和23年12月，生活社より刊行。

第2回（昭和23年11月13・14日）　（會場　東洋文化研究所）

第1日「東洋における知識人の性格」　議長……平野義太郎
ヨーロッパ……松田智雄
中國……吉川幸次郎
ロシア並に日本……除村吉太郎

第2日「東洋における神權政治」　議長……岩村忍

日　　本……小口偉一
中　　國……宇野精一
ヨーロッパ……戒能通孝

第3回（昭和25年5月13日）　（會場　東洋文庫）

「東洋の土地問題——最近における土地改革を中心として——」

議長……平野義太郎・仁井田陞

日本の農地改革と農村の社會關係——地主の小作地取上を中心として——……古島敏雄

中共の土地改革……旗田巍

右の報告は「東洋文化　第4號　特集・後進國の農業問題」に掲載。

附錄　東洋學會とその機關誌「東洋文化研究」及び「東洋文化」

東洋文化研究

創刊號（昭和19年10月）

發刊の辭……宇野圓空
ラオスの法律的性格……宮澤俊義
支那の開國と國際法……植田捷雄
宋代の商慣習「賒」に就いて……加藤繁
大木文庫と大木さん……仁井田陞
文化史上に於ける原始人……築島謙三
紹介批評
「民族研究所紀要　第1冊」……小口偉一
北京大學農村經濟研究所編「報告長編創刊號・第2號」……川野重任
「輔仁學誌（Monumenta Serica）第8卷」……鈴木中正

第2號（昭和21年9月）

米國最近の對華政策……植田捷雄

村の祭祀と家の祭祀……宇野圓空
東洋的文化の變貌……飯塚浩二
東亞原始民族に於ける教育……大場千秋
鏢局小志……今堀誠二
紹介批評
村田治郎「滿洲の史蹟」……三上次男
大熊眞「幕末期東亞外交史」……坂野正高
第3號（昭和22年3月）
福澤に於ける「實學」の轉回……丸山眞男
東南亞細亞に於ける大土地所有の形成とその經濟的機能……川野重任
言語表現に於ける象徴意識の樣相……築島謙三
紹介批評
吉川幸次郎「支那人の古典とその生活」をよみて……鈴木中正
「立博士外交史論文集」……坂野正高
第4號（昭和22年6月）
華北農村に於ける家族分裂の實態……仁井田陞
ヴェーダーンタ哲學の基本的立場……中村元
第5號（昭和22年8月）
特輯　世界新機構と東洋
日本の國際的地位……高野雄一
國際聯合と中國の地位……入江啓四郎
東亞諸國とブレトン・ウッヅ……原吾郎
フィリピン・ダバオに於ける日本人の發展（一）……鈴木忠和
第6號（昭和22年10月）
東亞に於ける最初の大司教モンテ・コルヴィノの傳道とその動機……江上波夫
阿片戰爭後における最惠國待遇の問題……坂野正高

フィリピン・ダバオにおける日本人の發展 (二)……鈴木忠和
懺悔道の宗教性 ——田邊元著「懺悔道としての哲學」をよみて——……宇野圓空
紹介批評
野村吉三郎「米國に使して」……植田捷雄
第 7 號 (昭和23年2月)
新東亞と日本農業 ——その生產力的關聯について——……川野重任
中國經濟と貿易……飯田藤次
ヴェーダーンタ哲學におる絕對者觀念……中村元
鎖國日本の觸角……魚返善雄
紹介批評
矢澤利彥「中國と西洋文化」……鈴木中正
第 8 號 (昭和23年6月)
ヴェーダーンタ哲學における個我の問題……中村元
佛教的思考……梶芳光遍
シャマニズム的世界觀の問題……小口偉一
紹介批評
內藤虎次郎「中國中古の文化」と「中國近世史」……山本達郎
第 9 號 (昭和23年9月)
ヴェーダーンタ哲學に於ける宗教的實踐……中村元
舊中國社會の特質論への反省……松本善海
清代に於ける宗教的叛亂の性格……鈴木中正
紹介批評
今堀誠二「北平市民の自治構成」……仁井田陞
アルバート・ハイマ「極東における和蘭」……荒松雄
貝塚茂樹「中國古代史學の發展」……江上波夫
第 10 號 (昭和24年2月)

中國の工業化問題……橋本秀一
日本に於ける華僑社會の形成 ——公所團體の成立經過について——……內田直作
舊中國國家の特質論への反省……松本善海
紹介批評
Hsien Chin Hu: 中國人の「顏」の觀念……築島謙三
飯塚浩二「世界史における東洋社會」……花村芳樹
石田英一郎「河童駒引考」……小口偉一

第 11 號 (昭和24年5月)

古代印度の婚姻儀式……辻直四郎
思惟の原初的形式とその發展……築島謙三
釜山開港を繞る若干の論議……秋保一郎

東洋文化

第 1 號 (昭和25年2月)

東亞における生活樣式の諸類型……飯塚浩二
北京工商ギルドの職業倫理……仁井田陞
ファーニヴァル「複合經濟論」の構造と批判……川野重任
日本の勞働關係の特質 ——法社會學的研究——……磯田進
報告・討論 人身賣買の問題
報告……川島武宜
討論……飯塚浩二・磯田進・仁井田陞・丸山眞男・村川堅太郎
史書なき印度の歷史……辻直四郎
匈奴フン同族論の批判……榎一雄

第 2 號 (昭和25年5月)

西洋及び中國における帝王傳記……上原專祿
中國繪畫における庶民……米澤嘉圃
日本における宗教とファシズム……小口偉一

報告・討論　日本人の思惟方法

報　　告……中　村　元

討　　論…辻直四郎・服部四郎・山崎正一・山本達郎・甘粕石介・佐木秋夫

日本ブルジョア民主主義運動史……平野義太郎

アメリカの極東研究……山本達郎

書　　評

村松祐次「中國經濟の社會態制」……橋本秀一

第 3 號（昭和25年7月）

中國における封建的商工業の機構　——生產關係より見たる內

蒙古の都市と農村——……今堀誠二

近代・それを如何に把握するか……まつしま・えいいち

身分と賃銀……美濃口時次郎

報告・討論　日本軍隊の崩壞　——將校出身學生との共同研究——

飯塚浩二・飯田林三・小松元一

書　　評

橋樸「中國革命史論」……花村芳樹

趙元任・楊聯陞：Concise Dictionary of Spoken Chinese…伊地智義繼

パール・バック「キンフォーク」……仁井田陞

第 4 號（昭和25年11月）

特集・後進國の農業問題

地主の小作地取上と農業改革の限界……古島敏雄

中國土地改革の歷史的性格……旗田巍

華北農業の技術水準……福島要一

報告・討論　後進國の近代化

報　　告……江口朴郎

討　　論……遠山茂樹・飯塚浩二・村松祐次・鈴木正四・仁井田陞

書　　評

松田智雄「イギリス資本と東洋」……衞藤瀋吉
鈴江言一「孫文傳」……仁井田陞

第 5 號（昭和26年2月）

中國社會の「封建」とフューダリズム……仁井田陞
家族主義社會の道德 ——中國農村の調査結果をめぐつて——…築島謙三
日本における古代國家の形成……井上光貞

書評

外務省「條約改正經過概要」……植田捷雄
山本達郎「安南史研究(一)」……和田久德
中國研究所「現代中國辭典」……小堀巖

第 6 號（昭和26年9月）

インド民族資本の精神構造への一視點 ——ヂャイナ教の經濟倫理——……中村元
中國における自由と資本主義……村松祐次
完成期に入る華語學 ——B. Karlgren 教授近年の業績——……魚返善雄
報告・討論 日本古代國家の形成
報告……江上波夫
討論……長谷部言人・三上次男・藤間生大・和島誠一

書評

飯塚浩二「日本の軍隊」……幼方直吉

第 7 號（昭和26年10月）

ウェーバーの儒教觀……貝塚茂樹
華僑資本の前期的性格——マレーの陸佑財閥を中心として——…內田直作
唐末諸叛亂の性格——中國における貴族政治の沒落について——堀敏一

書評

トマス・ライエル「一英國人の見たる日本及日本人」……築島謙三

第 8 號（昭和27年2月）

日獨伊三國同盟の締結とその目的 ——極東國際軍事裁判の記錄を中心として——……植田捷雄
中國經濟の量的把握……石川滋
農村人口問題の經濟理論的性格に關する覺書……川野重任
「西田哲學」の史的構造分析——その位置付けのための試論——宮川透
書評
貝塚茂樹「孔子」……小倉芳彦

Ⅷ 現在の研究課題 (昭和26年度)

(一) 共同研究

1 比較文化論的立場からみた日本文化
A 比較文化論的立場からみた日本文化の特質 ——特に日本の軍隊を中心として——……飯塚浩二
B 日本人移民における輸入文化と固有文化……泉靖一
C 社會科學における日本的考え方とアメリカ的考え方……築島謙三
D 比較哲學基礎論……宮川透
E 近代日本思想の史的構造分析……宮川透
2 ユーラシアにおける民族と文化
A ユーラシアにおける文化交流……江上波夫
B 北海道ストーン・サークルおよびオホーツク式遺跡の調査研究……關野雄
C ユーラシア大陸における遊牧民族の形成……石田英一郎
D 遊牧民の生活と文化……泉靖一
E 內モンゴルステップ地帶における中國人社會の性格……小堀巖
F 東南アジアにおける文化交流……山本達郎
3 民族宗教と社會倫理
A 隋唐における中國的佛教成立の諸要素と成立過程……結城令聞

B　戰後新宗教集團の成立に關する研究……小　口　偉　一

C　中國民衆道教の研究……窪　　德　忠

D　倫理的規範認知の構造……築　島　謙　三

E　庶民の宗教と經濟倫理　——日本における生產力展開を中心として——……花村芳樹・高木宏夫

F　庶民の宗教　——行動と態度について——……高　木　宏　夫

4　東洋における國家構造の史的研究

A　中國社會の「封建」とフューダリズム……仁井田　陞

B　原始社會の發展過程と國家の起源……石田英一郎

C　中國古代國家の成立……關　野　　雄

D　中國古代社會における階級と身分……西　嶋　定　生

E　中國古代村落制度　——とくに秦漢の鄉里制——……松　本　善　海

F　唐末五代における貴族政治の沒落……堀　　敏　一

G　宋代における官僚制の成立過程……周　藤　吉　之

H　金代の官僚と全眞教團……窪　　德　忠

I　中國近世における農民叛亂の特質……佐　伯　有　一

J　安南の政治と社會……山　本　達　郎

K　ムガル帝國の地方行政および revenue 徵收システム……荒　　松　雄

5　東洋における土地制度史

A　均田法施行以前における土地制度史　——とくに魏晉時代における——……西　嶋　定　生

B　均田法の成立……松　本　善　海

C　莊園の成立……周　藤　吉　之

D　莊園の發展……古　島　和　雄

E　インドにおける土地所有關係の變貌　——とくに zamīndārī, mahālwārī システムについて——……荒　　松　雄

6　東洋における國際政治秩序の近代化過程

A　中國の邊境喪失の過程……植田捷雄

B　李鴻章の對外政策と中國の近代化……植田捷雄

C　アヘン戰爭より天津條約に至る英國極東政策の展開……衞藤瀋吉

7　東洋的經濟秩序における發展の構造

A　アジアのナショナリズムと經濟の再編成……飯塚浩二

B　農地改革と資本蓄積……川野重任

C　インドネシアの經濟自立と工業化問題……橋本秀一

D　後進國の經濟構造とナショナリズム……花村芳樹

(二)　個別研究

A　古代中國の度量衡に關する研究……關野雄

B　中國に關する地理學的知識の發達……小堀巖

C　中國家族法研究　——とくに婚姻法について——……仁井田陞

D　華中稻作の展開……古島和雄

E　中國近世の手工業および機械工業の史的研究……佐伯有一

F　中國單色畫史の研究

——とくに秦漢六朝の白畫について——……米澤嘉圃

G　孔子の研究　——その人柄に接近する試み——……小倉芳彥

H　全眞教團の經濟的基礎……窪德忠

I　中國固有文化の變貌——キリスト教の傳來をめぐつて——…窪德忠

J　インドにおける分派時代および中國における初期の唯識思想……結城令聞

(三)　文部省科學研究費による研究

1　綜合研究

A　遊牧民族の社會と文化

a　遊牧民と定住民との關係についての研究……飯塚浩二

b　遊牧民の民族學的研究……石田英一郎

c　モンゴル遊牧社會の人口問題……泉靖一

d　遊牧民の物質文化……江上波夫

e　モンゴル方言の研究……江實

B　中國の變革期における社會經濟文化の相關關係の研究

a　中國社會の法および法意識の變革……仁井田陞

b　中國の政治組織の特質とその變革

——主として官僚組織の問題——……松本善海

c　現代中國繪畫の研究……米澤嘉圃

C　現代日本政治外交研究

a　日獨伊三國同盟の研究……植田捷雄

D　初期大乘の研究

a　初期大乘の業思想……結城令聞

2　試驗研究

A　講和に伴う日本の國際的地位の變化に關する緊急研究

a　日本の領土歸屬關係史……植田捷雄

3　各個研究

A　本邦北端における文化形成の研究……江上波夫

B　本邦巫俗の研究……小口偉一

C　物價水準の變動と農業……川野重任

D　アヘン戰爭前後における清國外交資料の基礎的研究……植田捷雄

昭和 27 年 8 月 23 日 印 刷
昭和 27 年 8 月 30 日 發 行

東京都文京區大塚町 56
編集兼発行者 東京大学東洋文化研究所

東京都文京区戸崎町 71
印刷所 小泉印刷株式会社